

教育メディアとしての紙芝居 —保育者養成課程における取り組み—

鬢 櫛 久美子

1. はじめに

2005年以来、教育メディア¹⁾として紙芝居の意義を探ってきた。保育史のなかに、また、倉橋惣三、松永健哉をはじめとした教育・保育関係者の見解に、その意義を見出してきた。そして、保育現場や、養成校の現状を調査することも合わせて行ってきた²⁾。2012年度は、子どもが紙芝居を作ることの意義についてまとめた³⁾。これまでの研究を踏まえて、保育者養成課程で紙芝居を教育メディアとして活用することの意義、方法を検討していくことが本稿の目的である。

2008年から総合演習のカリキュラムのなかで、紙芝居を教育メディアとした教育を行ってきた。この実践に関して考察する。ことに、学生が紙芝居を作ることを通して、どのようなことを学んだかを中心に検討したい。

2. 教育メディアとしての紙芝居の必要性

(1) 保育者養成課程にある学生と紙芝居

学生へのアンケート調査の結果からは、6から7割の学生たちが、幼児期に幼稚園や保育所において紙芝居が演じられるのを見た経験があることが明らかとなった。しかし、紙芝居を演じることに限っては、保育者養成課程に入るまではほとんどの学生に経験がないことが明らかとなった。また、紙芝居を作るということの経験は、演じる経験よりもさらに稀であった。

保育者養成課程における紙芝居教育についての調査では、演じ方の指導はされているものの、作り方、紙芝居の歴史や知識を教育しているところはほとんどないことが分かっている。

(2) 保育現場と紙芝居

保育現場のアンケート調査に、1週間に1回以上3、4回紙芝居を活用していると答えた園は7割以上である。紙芝居がよく活用されていることが理解できた。しかし、紙芝居を作るということは、ほとんど保育に導入されていないことが明ら

かとなった。

調査結果から、紙芝居の特性についての知識、紙芝居の演じ方・作り方などの技術を学ぶことを、保育者養成課程の教育に導入することは大いにあるという結果を得た。

3. 紙芝居を教育メディアとする目的

まず、いかなる学修成果を目的として、紙芝居を教育メディアとして導入するのかを考える必要がある。保育実践現場で、活用するための知識、技術、技能の修得という観点、すなわち保育メディアとして活用することを目的にして教育するということが考えられる。また、一方では、社会人に求められる資質、あるいは保育者として求められる資質を獲得するために教育メディアとして活用するという考え方もある。もちろん、この二つは重なり合い関連していることは言うまでもない。

(1) 保育現場で、活用するための知識、技術、技能の修得という観点から

・演じる技術の修得

倉橋惣三のように⁴⁾、自分が面白いと思うものは子どもにも見せてやりたいという考え方を優先させるとすれば、子どもが共感をもって観ることができるような「演じ方」を修得することを目標とすべきである。

・子どもに作らせる技術の修得

名古屋柳城短期大学の「手づくりキッズ紙芝居コンテスト」の2007年度から2011年度の作品を検討し、子どもが紙芝居を手作りすることの意義を探った。その結果、以下の点が明らかとなった。

①子どもの自己表出手段として有効である。

②子どもと大人の関わりを育む。

子どもの想像力、創造性の豊かさに驚かされるとともに、子ども理解につながる。

③保育のなかで、グループで紙芝居作りをするのが、5領域の総合的指導を可能にする。

④作ることから演じることへの興味が引き出さ

れ、紙芝居ごっこ遊びへと展開する。

上記③については、高橋五山も述べているところ⁵⁾であるが、子どもの総合的指導をねらいとして、5領域全体にわたる保育指導の方法としても、紙芝居制作は有意義なものである。

以上、昨年⁶⁾の考察で、保育に子どもが紙芝居を手作りすることを導入する意義は十分に認められた。保育実践に子どもの手作り紙芝居を導入するためには、まずは、保育者が紙芝居を手作りする方法を、実践的に理解することが必要である。そのためには、保育者養成課程に、手作り紙芝居を導入するべきである。

(2) 保育者として求められる資質の育成

現代社会は、IT化社会といわれコミュニケーションツールの発達が目覚ましい。便利であると同時にさまざまな問題が生じている。ことに、現代の若者がツールを経由したコミュニケーションに依存する傾向は強い。そのためか、目の前人との直接的な関わりを苦手とする学生が多いことが指摘されている。新卒者を採用する立場から、大学に「コミュニケーション能力」の育成が求められるのも事実である⁶⁾。また、保育者の資質として、子どもとの関わりはもちろんのこと、保護者とのコミュニケーション、保育者同士のコミュニケーションの能力が求められているにもかかわらず、新任保育者が十分なコミュニケーション能力を持っていないことも指摘されている。実際に、保育現場での早期離職者対策に園長、主任クラスの管理職者が苦慮していることも、新人とのコミュニケーションをどのように取ればよいかという問いとして挙げられている⁷⁾。このような現状を踏まえると、コミュニケーション能力育成のために、紙芝居を教育メディアとして活用することは有効だと考えられる。

紙芝居を保育に導入するための知識、技術を学ぶことを目的とするか、紙芝居をメディアとして、学生のコミュニケーション能力の向上を目指すかにより、保育者養成課程に、紙芝居をメディアとして導入する方法に違いが出てくる。ここでは、保育実践に活用するための教育について考えていきたい。

4. 紙芝居を教育メディアとした実践

2008年から2013年まで、名古屋柳城短期大学における総合演習の時間に、紙芝居を教育メディアとして教育を実施してきた⁸⁾。時間数は30コマ、すなわち90分×30回と授業時間外の自宅学習からなる。しかし、総合演習には学年全体で共通の課題を遂行することにも時間が割かれるため、紙芝居についての教育を実施できるのは、30コマのうち約15コマである。

テーマは「人と人のかかわりを育む紙芝居の魅力に迫ろう」である。最初から、紙芝居の特性を踏まえ、就学前の子どものコミュニケーション能力育成をねらいとした保育力の養成、学生のコミュニケーション能力の育成を目標とした科目として設定した。

概要は、以下の通りである。「保育の場では、よく紙芝居が使われている。なぜだろう。紙芝居の歴史を学び、紙芝居の魅力を探ってみよう。そして、保育との関わりを明らかにしよう。また、紙芝居の演じ方、作り方といった技術を磨き、人と人との関わりを育む保育を実践する力をつけよう。」このような、授業科目の内容と到達目標を設定し実施してきた。

前期の教育内容は以下のとおりである。

- ①紙芝居の歴史について
- ②紙芝居の魅力について
- ③紙芝居の演じ方について
- ④紙芝居を保育との観点から考える
- ⑤保育の「ねらい」を踏まえた紙芝居の選択
- ⑥紙芝居を演じる 学生同士で練習し発表する

(2013年度はオープンキャンパスで、紙芝居の実演を高校生とその保護者を観客として演じる機会が設けられた。学生たちは、授業時間外にも会場づくりのための準備を行った。この実践の機会の成果は大きかったと考える。学生は、会場づくり、観客の導引(広報)、会の進行、会場の片づけまで一連の作業を主体的に行った。)

前期の課題としては、紙芝居の知識を学び、紙芝居を選び演じることで、紙芝居の特性を理解するといった教育内容が中心である。

後期は、紙芝居を作ることに焦点が置かれている。

- ①紙芝居の作り方についての理解
- ②紙芝居のテーマを決める
テーマ発表と討議
- ③箱書を作る
場面ごとに絵と脚本を書く
- ④ミニ紙芝居を作る
- ⑤ミニ紙芝居を演じる
実習園でも試してみる
- ⑥実寸大の紙芝居を作る
- ⑦自作紙芝居を演じるとともに、友人の紙芝居を鑑賞する

以上のような授業内容に従い紙芝居を手作りすることで、学生たちはどのようなことを学習しているのだろうか。本稿では、学生の制作した紙芝居から、検討してみることにする。

5. 学生の制作した紙芝居に関する検討

学生が紙芝居を手作りすることで、どのようなことを学習しているのか、検討してみる。

(1) 紙芝居の特性を作ることによって学ぶ

①紙芝居の絵と脚本の関係

前期の授業のなかで、紙芝居の特性を知識として、また演じることで体験を通して学んでいるはずである。頭では理解していることであるが、しかし、実際に紙芝居を作るとなると、戸惑いや失敗も出てくる。例えば、登場人物が前に歩く場合は、人物はどちら側に歩いて行くように描くべきか。観客から見て、右から左に紙芝居を抜くことを考慮すれば、登場人物は、観客から見て左を向いていなければならない。このように、作ることによって、紙芝居の抜く向きを改めて理解する。

また、紙芝居の特性として最も基本的なことである、表に絵、裏に脚本が書かれていて、脚本は、ひとつ前の場面の裏に書かれていることも、制作することによって再認識されるのである。数年前に、中堅の保育士研修でグループによる紙芝居作りを実践したところ、いくつかのグループが脚本を絵のすぐ裏に書き、作り直すこともあった。保育経験者ですらこのような間違いが起きるのである。

実際作るとなると、抜く方向や、絵と脚本の関係など紙芝居の特性を、改めて学習することになる。紙芝居の特性理解にも、紙芝居を作ることの

意義が認められる。

②舞台を活用する場合の画面の周囲の余白の必要性についての理解

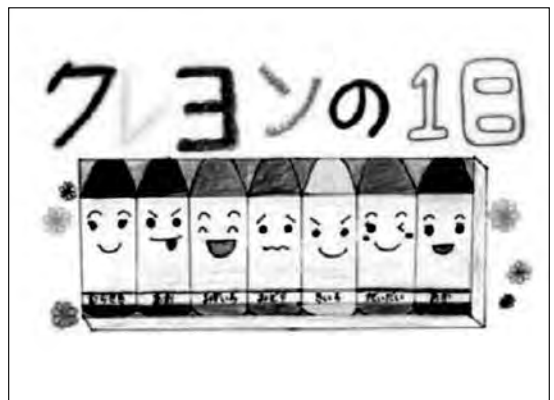
キットを使って、ミニ紙芝居を作成することで、舞台と紙芝居の関係に気づかされる。画面いっばい端から端まで使用したために、タイトルの一部が観客からは見えないということを、実際に作ることで学んだ学生もいる。保育現場でも、紙芝居の舞台が使われていない現状から、現役の保育者も、この点を認識していない可能性は高い。

舞台を活用して演じる場合のことを考慮し、画面の周囲がどのくらい舞台に隠れるかを実際に計測し、用紙の裏表ともその幅を書き入れてから、制作に入る必要があることを学生は学んだ。

③抜くという特性の面白さを紙芝居に活用

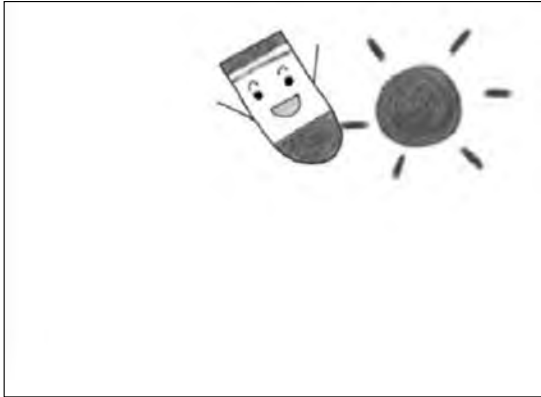
③-1. 作品例『クレヨンの1日』

3画面目から絵の左上角が弧を描いて切り取られている。切り取り部分は、画面が進むに従って1センチくらいずつ7画面まで増えていく。(図の黒い部分である。)最後の8画面に7色の虹が描かれているのであるが、1画面進むごとに虹の色が1色ずつ増えて見えることになる。作者である学生は、ミニ紙芝居とミニ紙芝居舞台を作成することで抜くという特性を活用した紙芝居作りに興味を抱いた。この特性を生かすために、物語も最初から考え直して、試作を繰り返し作り上げたのである。

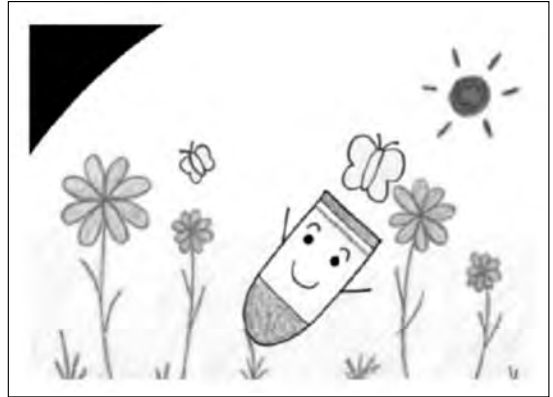


(1. 『クレヨンの1日』表紙)

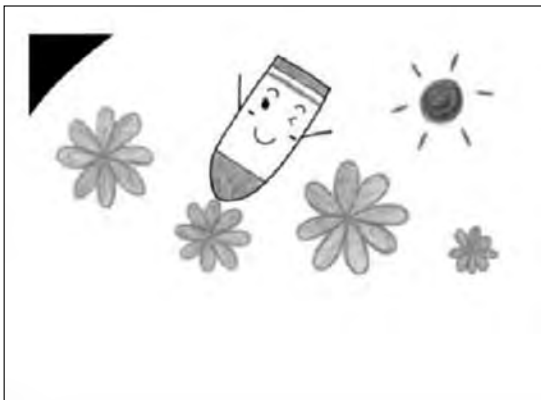
教育メディアとしての紙芝居



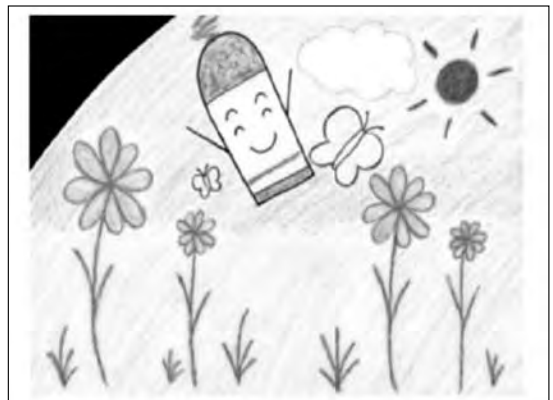
(2. 『クレヨンの1日』 1場面)



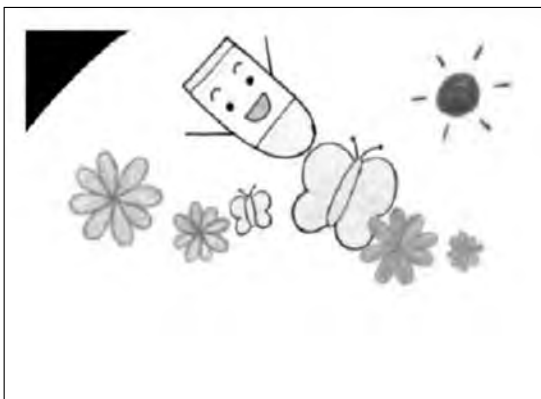
(5. 『クレヨンの1日』 4場面)



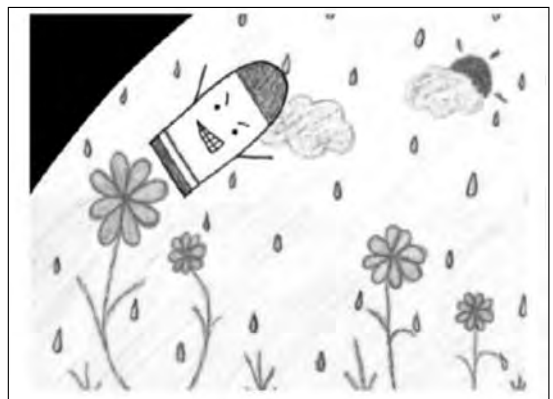
(3. 『クレヨンの1日』 2場面)



(6. 『クレヨンの1日』 5場面)



(4. 『クレヨンの1日』 3場面)



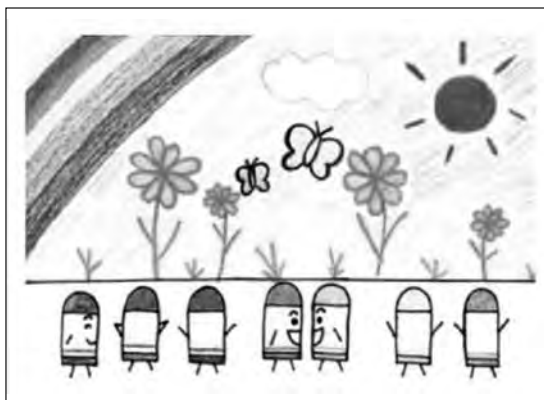
(7. 『クレヨンの1日』 6場面)



(8. 『クレヨンの1日』 7場面)



(10. 『なにかな なにかな』 表紙)



(9. 『クレヨンの1日』 8場面)



(11. 『なにかな なにかな』 1場面の1)

③-2 『なにかな なにかな』

各画面を2枚の用紙を貼り合わせて制作している。上の用紙は動物のシルエットが切り抜かれていて、下の用紙に絵が描かれている。張り合わせた間に色紙を挟み込み、「なにかな」と呼びかけてヒントも言い、観客の答えが出たところで、真ん中の色紙を抜いて正解が現れるように工夫されている。紙芝居の抜くという特性をうまく利用して参加型の紙芝居に仕上がっている。



(12. 『なにかな なにかな』 1場面の間に挟み込まれた紙)



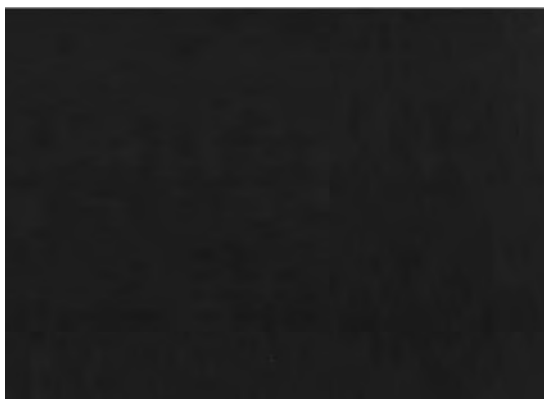
(13.『なにか なにか』 1場面 挟み込まれた紙を抜いた後)



(16.『なにか なにか』 2場面 挟み込まれた紙を抜いた後)



(14.『なにか なにか』 2場面の1)

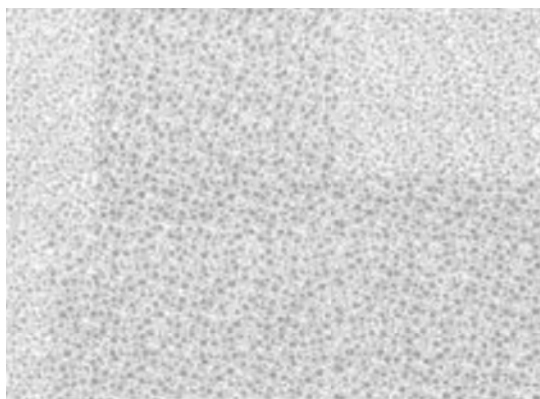


(15.『なにか なにか』 2場面 間に挟み込まれた紙)

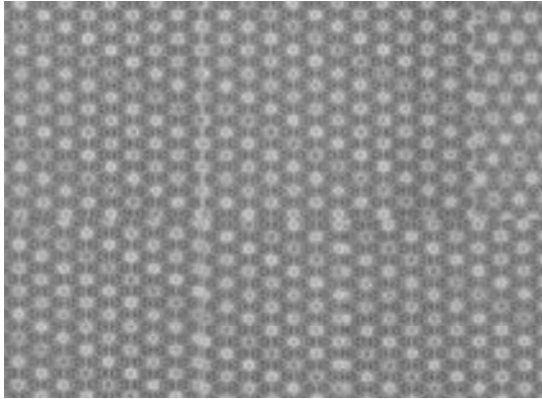
④演出力の効果

- ・幕紙を作成し、演じ方の工夫をする。

紙芝居の演じ方を知識として学習し、実際に演じることで体験的に学習した。演じる学習の時点では、例年とも、自発的に幕紙を作る学生はいなかった。しかし、自作紙芝居が完成した後、幕紙を主体的に作り出した。自作することで、自分の紙芝居をより効果的に演じたいという気持ちが出てきて、演出にも拘るようになったのではないかと考える。



(17. 包装紙を利用して作った幕紙)



(18. 包装紙を利用して作った幕紙)



(19. 『できるかな』表紙)

- 紙芝居舞台を使用してより効果的な実演を目指すために、自分の紙芝居舞台を段ボールで作製し、実習や就職活動の際の実演に用いた学生も登場した。

⑤-2 明確な「ねらい」を持ち、紙芝居を保育に導入

保育現場への紙芝居活用についてのアンケート調査によると、昼食の前後の時間や、お帰りの時間に、時間つなぎのために紙芝居が活用されていることが多い。

しかし、紙芝居を制作する場合には、子どもに何を伝えたいかという観点からテーマを決める。その結果、「ねらい」をもって積極的に保育に導入する姿勢ができると考える。既成の紙芝居を演じるにも、「ねらい」を意識し紙芝居を保育メディアとして活用することにつながる。すなわち、保育実践の場で、時間つなぎに紙芝居を演じるということからの脱却になるといえるのではないだろうか。学生の作った紙芝居を例に、見ていくことにしたい。

『できるかな』、この作品のテーマは、「歯磨きの習慣をつける」ということである。「ねらい」をもって紙芝居を保育に導入することが見て取れる。

学生は、楽しい雰囲気の中で子どもに歯磨きの習慣をつけたいと考えて制作したと言っている。第1場面は、保育園に出かけるところ。「何か忘れものはない」としゅん君はお母さんに聞かれ、戸惑っていると、妹のみいちゃんが「お兄ちゃん歯磨き忘れてるよ」という会話で始まる。とてもユーモラスな作品である。第5画面目は、画面いっぱいに描かれたしゅん君が大きな口をあけていて、口の部分にはフィルムが張られ、歯に虫歯菌がついた絵が水性ペンで描かれている。演じるときに、ペンの先にティッシュをくくりつけた歯ブラシで「ごしごしきゅっきゅ」というセリフとともにこすると消える仕掛けになっているのである。歯磨きは大切だということを、標語のようにいうのではなく、楽しく習慣づけたいという



(20. 『できるかな』第5画面 口の部分は画用紙を切りとり、そこにはフィルムが張ってある)



(21. 『できるかな』第6画面)

思いが、作り手の学生の工夫を引き出し、独創性があふれた作品となっている。

6. おわりに

本稿では、保育者養成課程に紙芝居を教育メディアとして用いることの意義を探ることを目的とし、総合演習での紙芝居をテーマとした数年間の教育実践を考察した。ことに、学生が紙芝居を作ることにより、どのような学修成果が見られたかに焦点を当てて検討した。

その結果、学生たちは知識としてすでに学んでいることや既成の紙芝居の実演を通して学習した演じ方に関して、自分のオリジナルな紙芝居を制作することで、より深く再認識していることが明らかになった。まさしく、「為すことによって学ぶ (Learning by Doing)⁹⁾」といえるのではないだろうか。

保育実践の場で、紙芝居を演じるにつけても、紙芝居の特性を意識したより効果的な演じ方につながる事が期待できる。

また、作る過程では、紙芝居のテーマを考慮することが重要となるが、この経験は、紙芝居を保育に導入する場合に、「ねらい」を意識し保育メディアとして紙芝居を活用することにつながると思う。既成の紙芝居を使用する場合でも、保育の「ねらい」に適切な紙芝居を選択することにもなるだろう。

保育の場で、子どもに紙芝居を作らせる契機にもなるだろう。その際、自分が制作した経験がど

のような保育方法を取ればよいか、指導案作りにも役立つであろうと考える。昨年報告したが、子どもに紙芝居を作らせるということを保育に導入すれば、子ども理解につながり、「大人と子どものかかわり」を保育者と子どもとの間はもちろん、保護者と子どもとの間にも育むことになる。是非実践してほしいものである。

本研究から、学生が作ることの意義は十分に感得できた。そこで、教育方法として体系化していくことが今後の課題となる。また、学生のコミュニケーション力育成のために、紙芝居を教育メディアとして活用することについては、本研究では言及できていない。今後時間をかけて探求していきたいと考える。

註

- 1) これまでの一連の研究のなかで、「教育メディア」というときには、伝達作用やコミュニケーション媒体に限定されることなくメディアという概念を、「人々の間にあって作用するもの」と規定して使用してきた。このような考え方の背後には、「メディアはメッセージ」というマクルーハンの考え方や、ベンヤミンのメディア概念の影響がある。メディアをコミュニケーションの前提にあるものとしてとらえるのではなく、相互主観的な関係のなかで意味が成立する場であると考えている。教授者が学習者に向けて、何らかのメッセージを送るための媒介、教材・教具という意味以上のものを含意している。
- 2) 『名古屋柳城短期大学研究紀要』に2005年度から2012年度まで掲載された論文を参照されたい。
- 3) 鬢櫛久美子他「手作り紙芝居の可能性－キッズ紙芝居コンテストの取り組みを通して－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.34. 2012. pp.77-86.
- 4) 倉橋惣三「人形芝居の話：幼稚園談話會講演の概要筆記」『幼児の教育』Vol.30. No.5 1930. p.18. p.22. 倉橋は、人形芝居や紙芝居について、自分が面白いと興味関心があるものは、子どもにも見せたいといっている。
- 5) 高橋五山は、1944年7月号の『紙芝居』のな

かで、子どもが紙芝居を手作りすることを保育に導入することは、保育の総合的な指導につながるという、手作り紙芝居の意義を強調している。

6) 日経新聞2012年7月16日朝刊

調査によると「新卒者を採用する立場から大学教育に求められるもの」の第1位がコミュニケーション能力であると報じられた。

7) 2013年愛知県私立幼稚園連盟主催の「園長・主任研修」のテーマは、「現代の学生気質と保

育者の資質」で若者といかにコミュニケーションをとったらよいかの問題となった。

8) 「保育科講義要項」『名古屋柳城短期大学学生便覧』2013. p. 145.参照

9) Learning by Doing (為すことによって学ぶ) は、J.デューイのカリキュラム論の特徴といわれる。本研究においてもデューイのカリキュラム論を研究する必要性は大きいと考える。今後の課題としたい。

The Results of Student's by Making “Kamishibai”

Bingushi, Kumiko*

本稿では、保育者養成課程に紙芝居を教育メディアとして用いることの意義を探ることを目的とし、総合演習での紙芝居をテーマとした数年間の教育実践を考察した。ことに、学生が紙芝居を作ることにより、どのような学修成果が見られたかに焦点を当てて検討した。

その結果、学生たちは知識としてすでに学んでいることや、既成の紙芝居の実演を通して学習した演じ方に関しても、自分のオリジナルな紙芝居を制作することで、より深く再認識していることが明らかになった。

作る過程では紙芝居のテーマを考えることが重要となるが、この経験は紙芝居を保育に導入する場合に、「ねらい」を意識した保育メディアとして紙芝居を活用することにつながると期待できる。既成の紙芝居を使用する場合でも、保育の「ねらい」に適切な紙芝居を選択することにもなるだろう。

また、これまでほとんど実施されていない、子どもが作る紙芝居を保育実践に導入する契機にもなる。その際、自分が制作した経験がどのような保育方法を取ればよいか、指導案作りにも役立つであろうと考える。

本研究から、学生が作ることの意義は十分に感得できた。そこで、教育方法として体系化していくことが今後の課題となる。

キーワード：紙芝居, 保育者養成, 教育メディア, 手作り紙芝居